

(九) 毛筆業の展望

以上われわれは獣毛加工業がどのようにしてこの町に起り、またどのようにして現状にたどりついたかを分析してきたのであるが、三三・八平方軒の広がり約一万人の人口をもつこの盆地帯に今もなおそれがいきいきとした生長を続けていることは何と言つても伝統と特技による奇蹟であると思わずにはおれない。若し、仮にこの地にわれわれの特産業がなかつたとしたら、どのような結果におかれていようか。或は

純農村にあえていられるかも知れないし、また平凡な副業をもつ半農村に終つていられるかも知れない。事実、一戸平均耕作反別約三反程度に過ぎないこの町に毛筆業が育てられていることにより、どれだけ多くの精神的、経済的肉付がなされているか分らない。恐らく全戸数の約八〇％は直接、間接に筆に関連してゐるであらうし、こういう人々によつて作られる生産品は北端から南端まで国土全域に販路をもつてゐるのである。郷土出身者がその地において熊野筆が陳列されているのを見て強い誇りを感じ、思はず温い郷土愛にむせぶことも決して稀ではない。われわれは、このように毛筆をこの地に紹介した始祖や、それを受けついで人々の限らない努力に対して心から感謝と敬意を捧げずにはおれないのである。しかし、こうした環境の中からもわれわれはいろいろな問題に直面しているのを知つてゐる。人間の文明は目まぐるしく変化してその一角は筆写の世界にも漸く顕著になつてきている。万年筆、ペン、マジックインキ等の対抗品は急速なテンポで普及しているし、絵具万年筆の考案も緒についてゐる。他方棒紅の使用も紅筆界にとつては勘定に入れておかねばならないことであらう。

われわれはこのような激しい波がしらに立つてゐるのであつて、問題はこの世相の認識を土台とし検討されねばならない。そして、そこにはいろいろなことがらが、飛躍の材料として浮びあがつてくるにちがいない。

利潤の前には人間の至情をも断ち切るという資本主義のきびしさにも自ら限度があることであらうし、経営の合理化問題も考えねばならないことがらであらう。一応、現在の配給理念をふりかえり、ただ慣習のみよりかかつた従来の経営形態を反省してみることも必要であるかも知れない。そして先ず内を整え、更に海外市場への途も開きたいものである。戦後朝鮮、台湾、満洲の市場を失つたことが痛撃であることはまだわれわれの記憶に新たなところである。

このような分析の中に習字復活運動が強く推し進められ、その尊い努力は次第に結実しつつある。それは一挙に解決されるような簡単な問題ではないが、明るい曙光が見え出していることも事実である。ただ「何故そうであるか」に掘り下げる用意は常に怠つてはならないと思ふのである。

ともあれ、われわれは、われわれの前途を悲観するものではない。ただ、どの途にも横わつてゐる難関がわれわれの途にもふさがつてゐることを知りたいのである。どこに、どういつた方法で突破口を求めていくかは真剣な態度で話しあわなければならないと思ふのである。悲観することが過度であつてもいけないと同様に樂觀も度を超してはならない。

われわれは何よりも郷土を愛する。だからこそ郷土の正しい姿をまともに見、その順調な歩みを念願しようとするのである。

書道はまた日本全土の課題であるとともに、われわれの郷土にじかにつながる問題でもある。裏から言えば郷土の力は実に日本書道会を支配するともいえよう。その力は、直接商戦の前線に立つ少数の商士のみによつて生み出されるはずのものではなく、町民各人が結集することによつて総合的にかく得されるものである。この意味において問題は当然われわれ全体にかかわりをもつてくるであらう。筆に明け暮れ「姉も妹も筆造る」町は、直接間接に、筆によつて支えられてゐるのである。

われわれは、全郷土が一丸となつて新しい構想をあみ出し、真剣にそれが実践される日を期待したいものである。